



—心の再見、共生—

東日本大震災、原発震災から人々は教えられ、それぞれに何かを受けとめています。海外の記者は取材から記事に「現地ボランティアの活動や被災地リーダーの行動、避難している人達の助け合い、穏かな姿に感動している」と伝えています。地域で問題があれば、まずは隣人同士助け合う精神がいかに大切か、と教えられます。

1. 宮戸島震災孤立 2 週間耐える

宮城県松島湾の宮戸島の中央には 9 世紀の貞観地震の慰霊碑が、津波の到達した位置を示すため建てられています。高台へ避難するための目安になりました。

島と陸側を結ぶ唯一の道とライフラインを津波が破壊し、人口約 1,000 人の住民の方は孤立状態に陥りました。停電断水の上、生活物資が入りません。住民は高台の民宿や個人宅に避難し、4 つの集落の区長が毎日小学校に集まり、被害の状況や住民に必要なものは何かと意見を交わして、各家庭にあった米、野菜、鍋を集落ごとに集めて、調理して配りました。

連絡担当の尾形さんは、「区長から住民に情報を伝える縦の組織と、住民みな顔見知りという横のつながりが活きた」と語ります。対岸の野蒜地区では 300 人が亡くなったと伝えられますが、宮戸島では助け合う、共に生きるという心によって死者 1 名行方不明 7 名にとどめることが出来ました。(朝日新聞記事より)

思いやりと公を理解する地域力で犠牲者を最小にすることが出来ました。

2. 黒川能、王祇祭

山形県月山の麓の黒川地区の鎮守、春日神社の神事能(黒川能)として 500 年以上もの間、地区の住民によって受け継がれてきました。能役者、囃子方は子供から長老まで約 160 人、能面 230 点、能装束 400 点、演目数は能 540 番、狂言 50 番という民族芸能として大きな文化財産(重要無形文化財指定)です。世襲で受け継がれており、みな互いに屋号で呼びます。

旧正月の王祇祭(おうぎさい)は最も重要なお祭りです。地区によって、上座、下座に別れて能座を作っています。2 月 1 日の未明、春日神社の神霊が宿る王祇様を上座、下座、それぞれの民家(当屋)にお迎えします。座集一同にそろい、座狩り(総点呼)があり、凍み豆腐が振舞われます。夕方から幼児が勤める「大地踏」で黒川能は始まり、式三番、能五番、狂言四番が夜を通して演じられます。

翌 2 日には、御神体が春日神社に還り、神前で両座が脇能を 1 番ずつ演じ、その後大地踏、式三番が両座立会いして行なわれます。その間に様々な神事も入り、全てが終了するのは夕刻になります。御神体の衣布は翌年の当屋に授けられて、次 1 年をかけて準備に入ります。

王祇祭は「豆腐祭り」とも言われ、当日に振る舞われる凍み豆腐作りは大豆の種まきから収穫まで黒川地区の生活になっています。当日豆腐作りに必要な大豆は、全員で協力して当屋のお宅に運ばれます。地区総出して、2 日かかりで串に刺した豆腐一万本が炉で焼かれ、一旦凍らせた後、タレや汁に浸けて振る舞われます。

祭り、能、農業、生活が共同体となって互いを思いやり助け合い、続けてきました。自分の我を優先するのではなく、人々の和と穏かに暮らすことに幸せを感じています。忘れかけていた日本の暮らしと心があります。

困っている人、貧しい人を思いやり、他者を助けて自分の喜びとし、共に幸せとなる精神性、信仰、共生の思想が息づいているのです。